



中田 エミリー
新潟出身。NST新潟総合テレビを経て、現在フリー。
その明るいキャラクターで活躍中の人気のアナウンサー。

本社からの要請で首相官邸へ詰めることになり、そこで約1ヵ月半、本社と首相官邸との連絡などを行っていました。

中田 え、首相官邸！それじゃあ、まさに国の中枢で事故対応をされていたんですね。

柳 はい。絶対に対応を間違わないわけにはいかないという非常に緊迫した現場におりました。その中で逐次報告される発電所の情報に触れながら、「みんな頑張ってくれよ」と祈ることしかできない自分にもどかしさを感じていました。

中田 そうだったんですね…

柳 その後、福島第一の勤務になり、作業員の休憩所を作るなどの作業に従事したのですが、事故現場を目の当たりにし、我々は取り返しのつかないことを起こしてしまったと身にしみて感じました。

中田 その後、生まれ故郷のこの地に戻られたんですか？

柳 はい。だからでしょうか、絶対にこの地を危険な目に遭わせないんだという強い思いを持つようになりました。

中田 その思いは、部下の方などにもお伝えしているんですか？

柳 部下たちには事あるごとに、事故当時やその後の福島で経験した事を話しています。そして、「二度とあのような事故を起こさない」という強い決意のもとで、みなが一丸となって日々の安全対策に取り組んでいます。

柳 部下たちには事あるごとに、事故当時やその後の福島で経験した事を話しています。そして、「二度とあのような事故を起こさない」という強い決意のもとで、みなが一丸となって日々の安全対策に取り組んでいます。

今、発電所にとって大切なものって、何ですか？

中田 では、そんな経験をされた柳さんは、柏崎刈羽原子力発電所をこれからどんな発電所にしていきたいと思っているんですか？

柳 実は先日私の家族が初めて発電所を見学しました。もちろん、今までも私の仕事を応援してくれていたのですが、安全対策を実際に目にして、取り組みを理解し、「ここまでやっているなんて知らなかった。これなら、安心」とも言ってくれました。その時に、実際に見てもらうことの大切さを感じました。ですから今は、新潟の一人でも多くみなさまに発電所を訪れていただいて、安全対策を実際に見ていただきたいと思っています。そのためには、情報発信などを通じて、みなさまが身近に感じる発電所にしていただきたいと思っています。そして、私たちは、いつ見てもいいでも恥ずかしくないように、常に高いレベルの安全を追求して、取り組みを続けていきたいと思っています。

中田 身近な発電所！確かにそれは私たちにとてもうれしそうですね。その柳さんの夢、早く叶えてください！

柳 はい。がんばります。



柳 部下たちには事あるごとに、事故当時やその後の福島で経験した事を話しています。そして、「二度とあのような事故を起こさない」という強い決意のもとで、みなが一丸となって日々の安全対策に取り組んでいます。



柏崎刈羽原子力発電所
第一保安部 タービン(2・3号)グループ
マネージャー

KASHIWAZAKI-KARIWA NUCLEAR POWER STATION
Special Interview
新潟で働く 私たちの思い
Vol.03

中田 エミリー × 柳 勝司

あの日のバトンを、決意に変えて繋いでいく。

みなさん、こんにちは。中田エミリーです。近くに原子力発電所があるのって、不安ですよね。だから、そんな気持ちを直接ぶつけてみようかとやってきました。柏崎刈羽原子力発電所。これまでは、津波を防ぐ対策や、緊急時に電源を確保する対策を行っている所員さんにお話を伺いました。

そして今回は、原子炉を冷やす対策に取り組んでいる所員さんに突撃しちゃいます。「原子炉?」「冷やす?」なんだか難しそうですが、大丈夫かなあ…

今、発電所では、万が一に備えてどんなことをやっているんですか？

中田 今日はよろしくお願います。早速ですが、柳さんは、今、発電所でどんな仕事をされているんですか？

柳 私は、普段は発電に使用するタービン(羽根車)のメンテナンスを行っています。そして、事故などの緊急時には、復旧班の注水隊として活動します。そのため、原子炉へ速やかに注水を行うための訓練を繰り返し行っています。

中田 原子炉への注水? 何のためにそんなことが必要なんですか？

柳 原子力発電は、運転を停止しても原子炉内の燃料を冷やし続けることが重要です。しかし、福島第一原子力発電所の事故では、電気が使えなくなり、冷やすことができなくなったことによって、重大な事故へと進展させてしまいました。その反省から、柏崎刈羽原子力発電所では、緊急時に様々な方法で原子炉を冷やす対策に取り組んでいます。その一つが、この消防ポンプ車による注水です。

中田 これは、消防車ですよ？

柳 そうですね。消火にも使用できますが、緊急時に原子炉建屋へ駆けつけ、高台にある貯水池の水を原子炉へ注水するポンプの役割も果たします。

緊急時に原子炉を冷やす対策って、他にはどんなことをしているんですか？教えて、林さん。

林 はい、お答えします。柏崎刈羽原子力発電所では、何重にも安全対策を準備し、もしもの時に大きな事故に進展しないように備えています。今回は、その中でも冷却対策についてご説明します。原子力発電は、例え運転を停止しても、原子炉内の燃料を水などで冷やし続けなければなりません。しかし、福島第一原子力発電所では、すべての電源を失ったことで原子炉を冷やすことができなくなり、過酷な事故に至りました。その反省から、柏崎刈羽では、高圧の注水ポンプや代替熱交換器車の追加設置、冷却水の確保などの対策を行っています。

まず、電源を失い、通常のポンプで原子炉を冷やせなくなった場合には、原子炉を止めた直後に高圧ポンプで初期注水を行います。その後、原子炉の圧力を下げて低圧ポンプによる注水と、熱交換器を使用した除熱が必要で、初期注水には、電気を問わず原子炉からの蒸気でタービンを回し駆動するポンプ(図①)を使いますが、万が一に備えて同じ仕組みのポンプを追加設置しました。また、原子炉の圧力を下げたとき、より確実に注水するため、ポンプ車(図②)を高台に分散配備しています。

そして、海拔45mの高台に貯水池(図③)を設置。確実に注水を行うために、約2万トンの水を確保しています。さらに、新しい除熱システム(代替循環冷却系)を開発・導入しました。既存の除熱システムが使えなくなっても、代替熱交換器車(図④)を使用し、原子炉の熱を取り除きます。

このように柏崎刈羽原子力発電所では、何重にもおよぶ設備で、様々なリスクにも対応できるよう、緊急時の冷却対策を行っています。

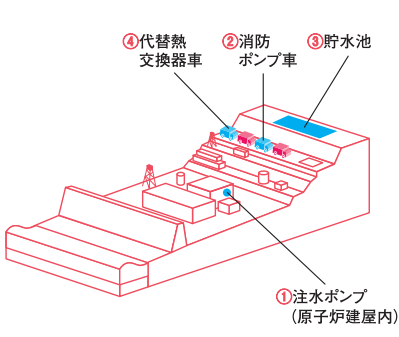
中田 事故が起こっている時の原子炉建屋に駆けつけるのって…

柳 確かに簡単なことではないと思います。しかし、福島第一の事故当時、事故を一刻も早く収束させようと決死の覚悟で戦っていた仲間たちを見てきた人間としては、この生まれ育った柏崎を危険な目に遭わせないためにも、自分が先頭に立って取り組んでいくんだという思いで、安全対策をすすめています。

福島第一の事故の経験は、取り組みに対する姿勢にどんな影響を与えたんですか？

中田 福島第一の事故のお話が出てきましたけど、あの時、柳さんはどちらにいらしたんですか？

柳 原子力発電所を建設中の青森県の事務所にいました。そして、事故から一週間後には、



東京電力ホールディングス
新潟本部
本部長補佐 林 幹夫



東京電力新潟本社 検索 <http://www.tepco.co.jp/niigata/index-j.html>



東京電力ホールディングス 新潟本社
025-283-7461 9:00~17:00 (土日・祝日・年末年始除く)